

2023年3月期 第2四半期 決算電話カンファレンス 主な質疑応答記録

日時:2022年10月28日(金)12:00 ~ 13:00

出席者: 代表取締役 社長執行役員 横田 浩、

代表取締役 専務執行役員 経営企画本部長 杉村 英男

<業績予想修正について>

Q:今回の下方修正について化成品が大きく下がっている中で、上期の予想は出ていないが、いつの予想に対してどの製品が下がったのか。

A:化成品については、電気・蒸気のコスト高止まりが一つのポイントであるが、一方苛性ソーダや、ソーダ・塩カルについては10月以降の値上げをユーザーに了解してもらっており、利益は積み上がる見通し。ただし塩ビについては、海外市況が軟化しており、とくにVCMが厳しく収益を圧迫する見込みである。

Q:ポリシリコンは下期で利益を取り戻すという説明だが、電子材料の通期から上期分を差し引くと、下期の利益が上がっていないように見える。予想の出発点がどこなのか、教えて欲しい。

A:電子材料において、ポリシリコンについては、主要な顧客に対して価格交渉が難航し、出荷数量を絞った。これにより数量未達のため上期収益を圧迫した。しかし全般的に価格修正が進んでおり、下期に残りの契約分が出ると十分リカバリーできると考えている。それ以外では、ICケミカルにおいて、ナフサ価格上昇分を上期で十分吸収し切れておらず、遅れて価格改定されるため、そのスプレッドが10月以降に出てくる。また台湾に新設した子会社について、まだ認定取得のためのサンプル出荷にとどまっております数量が出ていないため、今期は固定費が大きく響いてくる。その影響で収益は前年並みとしている。

<セメントの価格修正について、セメント事業の今後について>

Q:セメントは3Qで1,000円の値上げの行うとの説明があったが、見通しは立っているのか？

A:おおむねカバーできていると認識している。

Q:セメント事業において、他社で事業譲渡や工場閉鎖などの報道もあるが、キルン3本体制を維持するのか。また中計の「伝統事業国内ナンバーワン」や価格動向等も踏まえて、セメント事業の位置づけを説明いただきたい。

A:他社の発表は認識している。その上で、当社のセメント事業の位置づけは徳山製造所のインテグレーションの要の一つであり、他の製品の廃棄物を原料としていて、他社はそれを処分するのに対し、大きなメリットを得ている。セメントの収益はマイナスだが、そういった効果を見れば十分プラスになっていると考える。よって当面セメント事業を閉じるといったことは考えていない。一方で変動費が高止まりする中で、国内市場は縮小しており、キルン3本体制を維持し続けるかどうかについては市場の状況や収益動向を見て柔軟に対応していく方針である。

<歯科器材事業について>

Q:歯科事業において、説明ではまずアメリカで伸びていて、欧州や南米・アジアにも広がっているとのことだが、アメリカの今後の伸びる余地と、欧州・南米・アジアのポテンシャルについて、アメリカの規模感と比較して説明いただきたい。

A:アメリカはもともと1%程度のシェアだったが、現在は6%程度。ユーザーのリピート率が高く、口コミでの評判も広まっており、北米はまだ伸びる余地があると考え。欧州はもともと当社シェアが高く、従来製品との置き換わりが心配されたが、アメリカほどではないが、徐々にオムニクロマが浸透しつつある。アジア・南米は規模は小さいが、伸びが早く、南米や中東でずいぶん採用が進んでおり今後が非常に楽しみだと感じている。